

Title	大切片標本による肝硬変症の形態学的研究
Author(s)	辻井, 勉
Citation	大阪大学, 1966, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28908
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	辻	井	勉
	つじ	い	つとむ
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	8 9 5	号
学位授与の日付	昭 和	41 年 3 月 28 日	
学位授与の要件	医 学 研 究 科 内 科 系		
	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当		
学位論文題目	大 切 片 標 本 に よ る 肝 硬 変 症 の 形 態 学 的 研 究		
	(主査)		
論文審査委員	教 授	宮 地	徹
	(副査)		
	教 授	西 川 光 夫	教 授 岡 野 錦 弥

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

肝硬変症の形態学的研究にあたって近来特に強調されてきたことは、(1) 肝の病像を局所的にではなく、肝全体に亘って観察すること、(2) 形態学的特徴を可及的に記載すること、の2点である。肝臓の如く大きな臓器の場合、その各部分に見られる変化が必ずしも同一でないことがあり、通常顕微鏡標本の大きさでは肝全体の病変を正確に把握表現することが困難な場合も多い。更に臨床的にも腹腔鏡検査法の普及発達に伴い、肝の巨視的観察が重要な意味をもってきつつある。著者はこの2点に留意し、肝全体を観察する目的で肝の左右両葉を含む大切片標本を作成し、これについて、肝硬変症における偽小葉結節の大きさ、間質の巾等を肉眼的に測定し、これらを指標として、その肝硬変症の特徴を数的に表現する様式みると共に、原発性肝癌を伴う肝硬変と伴わない肝硬変の相違を示し、更に病理組織学的にも検索した。

〔方法ならびに成績〕

昭和29年1月より昭和37年11月迄の間に阪大病理学教室において剖検せられた肝疾患例のうち 201例について大切片標本及びそれに対応する顕微鏡標本を作製した。偽小葉結節の大きさとしては(長径×短径)の値をとり、これを各例について100箇所ずつ肉眼的に測定した。肝癌を伴う肝硬変症では大きな結節が多く見られた。各症例について平均値を求め、この値により肝硬変症を大結節型と小結節型とに分けた。両者の境界は 25mm^2 であった。大結節型では13例中9例に肝癌がみられ、小結節型では32例中1例のみにみられた。尚 Wilson 氏病の3例は大結節型よりも一層大きい値を示した。組織学的には大結節型は複小葉性で、間質が狭く、偽小葉内部に多中心性に再生増殖が起り、又繊細な線維による再分割が多くみられた。小結節型では偽小葉は円形のもが多く、大小不同が著明で、間質は一般に巾が広く、その中に崩壊しつつある肝細胞群や、他方再生増殖しつつある結節がみら

れ、多彩な像を示した。

間質の中の測定には組織標本の模写図を用い、この図に引いた多数の平行線によって切られる間質部分の長さの全長に対する比をもって間質比と名づけ、これが間質の占める面積を表すものとした。肝癌随伴の有無や、組織学的分類（Gall の分類による）をも考慮すると、間質比55%を境として肝硬変症はほぼ2群に分れるのではないかと推定された。肝癌を伴う肝硬変はすべて間質比40%以下であった。又55%以上の群は組織学的には全例が壊死後性肝硬変といわれる症例で占められた。最後に結節の大きさと間質の中について両者の関係を調べたが、ほとんど相関はみられなかった。

〔総括〕

1. 肝疾患 201例について大切片標本及びそれに対応する顕微鏡標本作製し、その内肝硬変症について、偽小葉の大きさ、間質の中を計測し、又組織学的に検討した。
2. 偽小葉結節の（長径×短径）の平均値より肝硬変症を大結節型、小結節型の2型に分けることが出来た。大結節型には肝癌を伴うものが多く（13例中9例）、小結節型では少ない（32例中1例）。
3. 組織学的には、大結節型は大部分が複小葉性結節よりなり、狭い間質により再分割される傾向がある。小結節型は亜～複等種々の偽小葉からなり、活動性で結節の崩壊、再生が盛んである。
4. 間質の面積に代る間質比を測定した。肝硬変症は間質比55%を境として2群に分れた。55%以上群は一般に壊死後性といわれるものであり、55%以下群には種々の型が混在した。肝癌を伴う肝硬変はすべて間質比が40%以下であった。

論文の審査結果の要旨

肝硬変症の観察にあって、偽小葉結節の大きさ、間質線維の中はその硬変肝の特徴を表すものとして最もよく用いられている指標であり、又客観的に肝硬変を把握する場合に重要な要素である。これらの要素の表現は従来各研究者の主観的な印象によることが多く、それに起因する混乱もしばしば見られた。著者は各要素を数的に処理することを考え、まず肝臓全体を含む大切片標本作製し、これについて結節の大きさ、間質の中を肉眼的に計測した。この様な大切片標本の観察により肝の部位による病像の差異を正確に把握することが出来、これは肝硬変症以外の肝疾患にも応用しうるものと考えられる。結節計測の結果は、その大きさにより肝硬変症が、大結節型、及び小結節型の2型に分れ、前者には圧倒的に原発性肝癌を伴うものが多いことが示された。又組織学的にも両型の間に著明な差異が認められた。間質の中については、これも狭い間質をもつ肝硬変症と肝癌との間に密接な関係のあることが示された。以上大切片標本の作製により肝の肉眼的観察を容易ならしめ、又肝硬変症の特徴を数的に表現し、特にそれと原発性肝癌との関係を明確化した点に意義があると認められる。